



『秀吉と秀長』 ~「豊臣兄弟」の天下一統

柴 裕之 著

NHK出版 (NHK出版新書)

2025/10 232p 1,078円 (税込)

- 第一章 秀吉・秀長兄弟の出生
- 第二章 織田家家臣としての活躍
- 第三章 本能寺の変後の主導権争い
- 第四章 豊臣政権の成立
- 第五章 「天下一統」の達成へ
- 第六章 秀長の死去と豊臣政権の行方

【イントロダクション】

2026年から始まるNHK大河ドラマ「豊臣兄弟!」。仲野太賀演じる主人公が、羽柴(豊臣)秀吉の弟、秀長である。戦国時代の「天下人」の一人に数えられる秀吉と比べて知名度は高くないが、秀吉の偉業をすぐ側で支え、「天下一統」に欠かせない働きをした有能な武将とされる。秀長はどのような人物で、どんな功績を立てたのか。本書では、史料も少なく一般的に知られていない秀長の実像について、同時代の史料をひもときながら描出している。秀吉より3~4歳下とみられる秀長は、「弟」という立場からだけでなく、その「才覚」を発揮し秀吉の期待に十分に答えることによって絶大な信頼を得ていたという。例えば政治的後見である「指南」役を担い、秀吉に臣従したそうそうたる武将との関係性を築いたり、それを維持する要となっていたりしたようだ。著者は東洋大学・駒澤大学非常勤講師。「豊臣兄弟!」の時代考証も担当している。著書に『徳川家康——境界の領主から天下人へ』(平凡社)、『清須会議——秀吉天下取りへの調略戦』(戎光祥出版)、編著書に『豊臣秀長』(戎光祥出版)など多数。

● 対照的な性格だった秀吉・秀長兄弟

日本の戦国時代、尾張国中々村(愛知県名古屋市中村区)の百姓の子として生まれた羽柴(豊臣)秀吉は、織田信長に仕えて、「才覚」を発揮して出世を遂げていく。そして、主君の信長が謀反によって討たれた「本能寺の変」の後には、競い合う諸勢力との戦いに勝ち抜いて、中央に君臨した国政の主導者(天下人)となり、国内諸勢力を率いていった。

秀吉の業績は、彼一人だけで成し遂げられたわけではない。秀吉の台頭を陰ながら支え続けた多くの人たちがいた。そのなかでも特に欠かすことのできない人物が、弟の羽柴秀長(1540~97)である。

羽柴秀長は、天文9年(1540)3月2日に生まれたとされる。その人柄について、秀長の葬儀で導師を務めた京都大徳寺の僧侶・古溪宗陳は、自らが書き記した引導法語のなかで、秀長を、秀吉の信頼が篤く文武両道で威張ることなく穏やかであったとする。

(*史料によれば)優れた「才覚」の持ち主で、「人たらし」である一方、脅威を感じさせる秀吉。そして、穏やかな性格であった秀長。この兄弟が互いを支え合うことこそが、刻々と移り変わる戦国という時代の情勢に対応し、彼ら兄弟が飛躍を成し得た理由なのかもしれない。

●臣従させたかつての主家、織田家との関係を維持する

(＊羽柴軍と織田・徳川軍が対立した)小牧・長久手合戦で勝利を収め、天正12年(1584)11月22日に従三位権大納言となったことで、羽柴秀吉は名実ともに主家であった織田家に代わる天下人としての第一歩を踏み出した。

織田家が天下人秀吉に従う存在となったということを世間へはっきり示すには、(＊織田家当主の)織田信雄を上洛させて、秀吉の面前で臣従を誓わせる必要があった。信雄の上洛交渉は、重臣の富田一白が織田家へ派遣されていたが、織田家側に抵抗があったのか、まとまる気配をみせなかった。この状況に、天正13年(1585)1月、秀吉は秀長を自身の「名代」(代理人)として信雄のもとへ下向させ、交渉の進展を試みた。

秀吉の意を受け、秀長は信雄との上洛交渉に努めた結果、信雄は上洛することに応じた。この時の具体的な交渉のやりとりはわからないが、秀長は秀吉の「名代」として期待に応え、しっかりと役割を果たしたのである。

3月10日、秀吉は従二位内大臣に昇進した。この昇進で、天下人秀吉を主宰者とする中央政権である、“豊臣政権”が成立し、始動した。

織田信雄が上洛し秀吉に臣従するなかで、秀長は信雄の「指南」(政治的後見役)を務め、信雄の正妻(北畠具教の娘)が上洛した際には大坂の秀長屋敷を修築のうえ住まわせるよう、秀吉から指示を受けている。以後、秀長は、天下人羽柴家とかつての主家であった織田家との政治関係の維持にも「指南」として努めていく。

●一門のなかで最も信頼され、四国攻めの総大将を務める

天正13年4月、羽柴秀吉は土佐長宗我部家に対し、来る6月3日の四国出兵を宣言する。そして6月15日から翌16日にかけて、羽柴軍の先勢として秀長を大将とした軍勢が四国へ向けて出陣した。

秀吉は大将の秀長に、長宗我部家が土佐一国の領有に応じるのであれば軍事行動は止めること、また自身が翌月3日出陣するという意向を伝え、四国への渡海を指示する。

秀吉の指示に従って、淡路国から渡海し阿波国へと侵攻した秀長が率いる羽柴軍は、まずは同国の玄関口に立地した要城(重要な拠点城郭)である長宗我部方の木津城(徳島県鳴門市)を攻撃した。しかし、同城の攻略はなかなか進まず、秀吉の出陣が刻々と近づいてしまう。

この事態に、秀長は秀吉近臣の細井方成を通じて、秀吉に書状を遣わし、いまだ長宗我部方勢力の攻略を果たしていないなかで、秀吉が出陣するのは敵に侮られることになりかねないとして、秀吉の出陣を取り止めるよう求めた。秀長は、秀吉が出陣しなければ、羽柴軍は四国討伐戦を進められないのだと長宗我部方に見透かされ、今後の戦況に影響を及ぼし兼ねないことを危惧したのである。

秀長の出陣中止の求めを受けて、秀吉は出陣を延期した。その後、越中の佐々成政の討伐に専念していったこともあり、秀長に四国攻めの総指揮を委ねていく。秀吉の出陣が延期、そして取り止めとなった時に、秀吉の代わりに総大将となり大軍勢を率いて指揮を取れるのは、一門のなかで最も秀吉から信頼を得ていた“弟”の彼をおいてほかなかったからである。

こうして四国攻めの総大将を務めることになった秀長は、木津城を落とした後、牛岐城(徳島県阿南市)を攻略したうえ、長宗我部方の要衝である一宮城(同徳島市)を攻撃した。こうした事態に、長宗我部方は和議(実質は降伏)を求めた。これに対して、7月25日、秀長は長宗我部家が土佐一国を治めることの保証を約束したうえ、停戦に応じている。

●同じく“弟”であった家康とは違い、政権中枢に関わる

天正14年(1586)10月27日、秀吉・秀長兄弟の妹婿となった徳川家康は大坂城に登城して、秀吉の面前で臣従を誓った。

天下人秀吉を支える“弟”としてあった家康と秀長であるが、その役割は異なった。家康が秀吉から期待された役割は、関東・奥羽「惣無事」(豊臣政権による関東・東北

地方の統制と従属) 実現のための外交・軍事における活動である。あくまでも政権を支えるためのものであり、政権中枢の運営には関わっていない。

一方、秀長は、一門筆頭の執政として秀吉の意向に従いつつ、羽柴家一門衆や重臣を率いて政権運営に携わり、豊臣政権と諸大名との関係維持に努めることを求められた。そのため、秀長は「指南」として、織田信雄、徳川家康、毛利輝元、小早川隆景、吉川広家、大友宗滴・吉統父子、島津義久・義弘兄弟、龍造寺政家、伊達政宗といった諸大名と、彼らが上洛した際の接待や日々の贈答を通じて、交流を深めていった。

よく知られているように、大友宗滴が上洛し摂津国大坂にいた秀長のもとを訪れた際に、秀長が発したとされる「公儀の事は宰相存じ候」(*公の事は宰相である私・秀長に相談せよの意)、『大友家文書録』六所載文書)とは、豊臣政権における羽柴家一門衆の筆頭として秀吉の補佐・代行(「名代」)を務め、政権運営に携わる執政者(一門筆頭の執政)としての彼の立場と、その立場に応じた諸大名との関係維持に奔走する「指南」としての役割を端的に述べたものといえよう。

そして、政権のもとでの国内秩序を乱す存在には、秀吉とともに豊臣軍を率い、場合によっては秀吉に代わり豊臣軍を率いる大将として軍事討伐に従事し、終戦・占領後には該当地域の戦後処理と統治のための体制を整備する、「仕置」の実務を指揮した。このほか、羽柴家の本城である摂津大坂城や山城淀城など豊臣政権の畿内統治における拠点城郭の普請も、秀長の監督のもと、諸大名や諸将を率いておこなわれた。

秀長は、秀吉からの絶大な信頼を受け、それに応える「才覚」を発揮し続けることによって、天下人秀吉の“弟”として豊臣政権における「一門筆頭の執政」の立場を得ていたのである。

●秀吉の政権運営を軌道修正させた秀長の死去

天正 19 年 (1591) 1 月 22 日、秀長は死去した (*死因は病死)。享年は 52 である。

秀長は儉約・蓄財家であった。亡くなったとき (*居城としていた) 大和郡山城では、金子が 5 万 6000 枚余、銀子が二間四方の部屋に天井際まで積まれているほど莫大にあり、銭は何万貫文あるのか、わからないくらいであったとされる。

1 月 29 日、秀長の葬儀が盛大におこなわれた。その葬儀には京都や高野山、大和国の僧侶や参列・見物人が 20 万人以上もいて野も山も人ばかりといわれたように、多くの人が訪れた。さらに一周忌供養は繰り上げて同年 9 月 22 日に実施された。その際には秀長の生前に密接な親交関係にあり、秀長の病を気にかけていた羽柴家親類の有力大名、徳川家康も参列している。

これから東アジア外交・軍事にあたらうとしていた秀吉にとって、秀長は国内政治を任すことのできる、最も頼りとしていた自身の輔弼(豊臣政権における羽柴家一門衆筆頭の執政)を務めてきた“弟”であった。その秀長の死去は、同年 8 月に秀吉嫡男の鶴松がわずか 3 歳で亡くなったことと合わせて、以後の政権運営の軌道修正を余儀なくさせてしまうのである。

※「*」がついた注および補足はダイジェスト作成者によるもの

コメント：本書には秀長の領国(主に大和・紀伊国)支配の様子も載っている。それによれば商工業を保護し城下町を振興させる、家臣による地域住人への不正を取り締まる、インフラ整備や寺社造営を進めるなど、「領国の安泰に努めるべき統治者に求められる役割」を着実にこなしていたという。秀吉の高い期待に応え結果を出し続けたことを踏まえても、自らに与えられた役割や置かれている立場を正確に捉え、行動する人物だったと想像できる。秀長の足跡からは、「自分の役割を果たす」という一見地味な姿勢の意義を、改めて認識させられる。